

平成七年度

春季公開

講演要旨

親鸞における信仰主体の問題

法蔵菩薩の自証

本学教授 小野 蓮 明

『顕浄土真実教行証文類』は、親鸞が法然の選択本願念仏の教えに出遇い、如来の本願真実に帰して生さるものとなった、その信仰の書であると同時に、それは「浄土真実の教行証を顕わす」といわれるように、真実の教行証、すなわちわれらの立つべき真実の仏道を「浄土真宗」として開顕した、真宗開顕の書である。元久の法難や興福寺奏状を経て起こる承元の法難の念仏停止、さらには嘉禄の法難にいたる念仏の弾圧、親鸞の生涯は、法然の念仏の教えへの厳しい批判と弾圧の中に生きることになるが、だからこそ親鸞は、よき人法然の仰せこそ「証道いま盛りなる」「浄土の真宗」であることを、顕らかにする使命と課題を担うたのである。

法然の浄土宗独立は、選択本願への絶対的な信頼に立って、聖道諸宗が仏道実践の必須と掲げてきた発菩提心までも無用であると断言して、選ばれた者のみに開かれてきた聖道の諸教と完全に訣別して、時代民衆の苦悩のただなかに開かれた唯仏一道こそ、選択本願念仏の一道である、と宣言されたのである。いまその法然の主張が、厳しい批判と弾圧にさらされたのであるから、その仰せに育まれ教養されたものとして、親鸞は「浄土真実の教行証

を顕わにする」という、仏道開顕の歴史的課題を担うこととなったのである。したがって親鸞の関心は、仏教の教理や思想の体系化ではなくて、末法五濁の世の苦悩の群生海を救済する真実の仏道とは何かという一点であって、それこそ法然興行の選択本願念仏の一道であり、その一道を「誓願一仏乗」と確かめて、群萌に開かれた一乗であることを明らかにされたのである。

それでは親鸞において、法然の本願念仏の教えが無上仏道であるということが、どのように開顕されたのであろうか。親鸞は、法然の念仏往生の教えに出遇って獲得した選択本願の行信という信仰的自覚に立って、本願の念仏をより根源的に「本願の名号」と了解し、その本願の名号を行信する道をもって、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であると開顕されたのである。本願の名号を行信する一道こそ、群萌に開かれた無上仏道であると叫ぶ、親鸞の言葉は多い。

。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、即ちこれ常楽なり。常楽は即ちこれ畢竟寂滅なり。寂滅は即ちこれ無上涅槃なり。……(『教行信証』証巻・原漢文)

。ひとすぢに具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。(『唯信鈔文意』)

ここに「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」とか、「具縛の凡愚、屠沽の下類」などといわれているものは、親鸞において「真実教」と決定された「大無量寿経」において、如来の本願の機を語った「群萌」の現実相を示すものである。その「煩惱成就の凡

夫、生死罪濁の群萌」が、「往相回向の心行を獲」ることにおいて、「大乘正定聚の数に入る」といわれ、また「具縛の凡愚、屠沽の下類」なるものが、「無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号の信樂」において、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」といわれるのである。その場合の「往相回向の心行」といい、「無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号の信樂」といっても、それは要するに、如来の大悲回向に帰し、如来の本願招喚の勅命に喚び覚まされた根源的な覚醒であって、一心帰命の信である。本願の名号に帰し、本願の名号に覚醒された信心において、大乘正定聚の数に入り、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるのである。煩惱具足の凡夫を、煩惱具足のままに無上大涅槃にいたらしめ、大乘正定聚の数に入らしめる本願の名号こそ、浄土真実の仏道の法であることを、親鸞は「大行」と顕揚し、この名号の信樂に成就する仏道を、群萌に開かれた一乗であるとして、「ただこれ誓願一仏乘なり」と喝破されたのである。

法然が往生浄土の正業が念仏であることを、行と行の相對において明らかにされたのに対して、親鸞は、

一乗海と言うは、一乗は大乗なり。大乘は仏乘なり。一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提は即ちこれ涅槃界なり。(中略) 一乗は即ち第一義乘なり。ただこれ誓願一仏乘なり。(行巻・原漢文)

といて、真に一乗、大乘の名に値する仏道は、「ただこれ誓願一仏乘なり」と言い切られたのである。そして、その誓願の仏道の内実を選択本願の行信と捉え、その自覚内容を「誓願不可思議、一実真如海」とあるといい、それが『大無量寿経』の宗致であると明らかにされたのである。本願の行信の自覚内容が「誓願不可

思議、一実真如海」というとき、一実真如海とは、如来の智慧海である無上涅槃の世界を意味する。その如来自証の無上涅槃の功德が、如来の本願を信する信の一念に、信する人の身の上に開示され、現成する事実を、誓願不可思議といったのである。

誓願とは阿弥陀の誓願であり、生死苦惱の一切衆生を我が国に生らしめ、無上仏に成らしめなければ、仏自ら仏としての正覚を取らないと誓う、かの根本本願である。第十八の根本願を、善導法然は念仏往生の願と了解されたが、親鸞は、この了解を承けつつ第十八願を至心信樂の願と呼んで、信心成就の願と了解された。名号の成就を第十七の諸仏称名の願に譲り、第十八を至心信樂の願として信心成就の願と捉えたのである。十七願と十八願を、行と信の願として了解されたということは、信仰的自覚における客観的契機である名号は勿論のこと、その名号に開かれる信心自体も、如来の願心の回向成就であるということを、明瞭に聞き当てられた了解である。

しかれば、もしいは行・もしいは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざるることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。(信巻)

法然の念仏の教えを最も深く主体的に尋ね当てた親鸞は、行も信も「阿弥陀如来の清浄願心の回向成就」であると明らかにされた。ここに親鸞の信仰的自覚の深さと、信仰思想の特質がある。いまそのような独創的な思索のもつ意味と根拠を尋ねたいと思う。

親鸞は「真実の教、浄土真宗」と仰いだ『大無量寿経』について、次のようにいう。

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、

凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。こゝをもつて如来の本願を説きて、經の宗教とす。すなわち仏の名号をもつて、經の体とするなり。(教卷・原漢文)

『大無量寿經』の根本精神として教説される本願が、「如来の本願」「弥陀の誓願」として了解されているところに、本願の教説が単なる客観的な教説でなく、「凡小」とか「群萌」といわれる本願の機の苦惱に大悲同感して、その苦惱の衆生の流転を転じて、真如法性の世界である無上涅槃界に喚び帰えたいという、「如」なるものはたらきを最も深く読み取られた了解が、そこにある。本願の教説において、発願が法蔵菩薩であり、阿弥陀仏はその願を成就された果として、いわゆる因位と果位において思念されていることに注意すべきである。

『大經』の法蔵菩薩出現を語る叙述に注意するとき、法蔵菩薩とは、師仏である世自在王仏の説法を聞いて自己の内なる闇を知らしめられ、国を棄て王位を捐てて一人の沙門となつて、「無上正真道の意」を發して菩薩道を歩まんと決意したときに得た名である。しかも阿弥陀仏の因位である法蔵が世に出現されるまでに、五十三仏の仏々の伝統と歴史があることが示されている。その叙述は、法蔵説話といわれるように、恰も神話的な表象をもつて語られてゐる。しかし法蔵物語を、ただ客観的に対象的に解釈するのではなくて、神話的表象のもつ実存の意味を掘り起こして、説話を実存論的に解釈することは、極めて大切なことである。実存論的に解釈するとは、物語を実存の方向に引き寄せて、主体的に解釈するということである。

キリスト教の世界において、『聖書』のもつ神話的表象の実存論的解釈を提起したのは、ドイツの神学者ルドルフ・ブルトマン(R. Bultman, 1884-1976)の「非神話化」(Entmythologisierung)の提唱である。それは、『聖書』の中から神話を取り除いて教えを合理化し、現代人にキリスト教を受容し易いようにするという、単純な試みではなく、『聖書』のケリユグマ(宣教)の個々のモチーフが、古代の神話的世界像や思惟形式をもつて表象されていることを重視し、十九世紀以降の自由主義神学がこれらを批判的に選択し削除し、『聖書』のケリユグマ自身も削除してしまつた誤りを指摘し、また同時に神話的表象をそのまま容認することも否定して、ケリユグマの神話的表象の積極的解釈、すなわち実存論的解釈を主張したものである。神話はその表象や表現において神話的である。しかし神話には、そのような表象を用いなければ語れない、根源的な「こと」が蔵されている。一般に表象や表現は言葉によらなければならないが、しかしその言葉が何の奥行きも深さもない単なる言葉のレベルで考えられる場合、その言葉は宗教的意味を持つことはできない。言葉の宗教的性格は、象徴とか表象といわれるが、それは言葉が文字や音声以上のもの、つまり言葉や音声を超えたものと一つに成立し、絶対超越的なるものに貫かれ、語り現わすことのできないものを語り現わす、唯一の方法を意味する。神話は、人間存在にとつて最も根源なる出来事の表象である限り、神話のもつ本来の意図は、つねにわれわれ人間存在の「いま、ここ」における自己の実存性を開示する本質契機として了解されなければならない。法蔵説話も、単なる物語としてでなく、「いま、ここ」における自己の実存性を根源的に開示せんとする契機として理解すること、すなわち法蔵物語の

すべてを主体的に、自己の生存在の根源底における信仰主体の事実として、実存論的に了解するということは、極めて重要である。

仏、阿難に告げたまわく、乃往過去、久遠無量不可思議無央数劫に、錠光如来、世に興出して、無量の衆生を教化して度脱して、みな道を得せしめて乃し滅度を取りたまいき。次に如来ましましき。名をば光遠と曰う。次とば月光と名づく。

(中略) かくのごときの諸仏、みなことごとくすでに過ぎたまいき。〔大無量寿経〕上・原漢文)

世尊が語り始める法蔵出現の物語は、その久遠の歴史的背景から語られている。この難解な叙述は何を意味するものであろうか。それは、時を超えた真実なる如来が、時のうちに現前し現働するはたらきを語るものではあるまいか。錠光如来以下の五十三仏の仏名に注意するとき、「光」という仏名の多いことが知られる。光はつねに闇に現われ、闇を破って光の世界に転ずることにおいて、真実の光となるのである。光と闇、仏と衆生の相即における歴史生成の始源を語るものこそ、法蔵出現の物語ではあるまいか。一切の貧苦を救う真実の法の光は、常に救われるべき苦悩の衆生に即して法の歴史を形成するのであるが、阿弥陀仏の因位・法蔵菩薩の発願と修行の教説は、何よりも苦悩の衆生に即して常に光り輝く法の歴史の形成を説き示すものである。それは、如来のはたらきの久遠性を如実に語り伝えていくが、同時にわれら衆生の無明流転の闇の歴史の久遠性を知らしめるものである。法蔵の願心が「不可思議兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植するといわれるのも、無始以来無明海に漂没するわれら衆生が存在するからである。

阿弥陀仏は自ら仏たる地位を去って、菩薩法蔵の立場を通るこ

とにおいて真に仏と成らんとするのである。法蔵菩薩とは、如来における如来自身の自己限定であって、仏における不断の如来するはたらきを現わすものといえる。如来は自らの外に無明の衆生を発見したのではなく、自らの智慧の内に見出したからこそ、「設我得仏十方衆生」と喚んで、「至心信樂欲生我國」という大悲願心を発して、「若不生者不取正覺」と誓われたのである。

法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかればこころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりたまいて不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。この如来を報身ともうす。誓願の業因にむくにたまえるゆえに報身如来ともうすなり。(唯信鈔文意)

阿弥陀仏が単に一如の智慧の現われであるならば、色や形を超えた一如が阿弥陀仏として現われたともいえようが、親鸞はそうはいわない。もしそうであれば、仏の慈悲は理解されない。親鸞は、一如・法性法身は法蔵比丘となり、大誓願を發し修行して報身となつたといつて、法蔵としてはたらく無限の慈悲こそが、阿弥陀仏の本質であることを教えている。親鸞の法身、方便法身、報身の思想は、曇鸞の二種法身の教説に導かれたものであろう。

本願の思想において、発願が法蔵菩薩で、その成就が阿弥陀仏であるとして、法蔵と阿弥陀仏がいわゆる因位と果位において思念されているのは、阿弥陀仏とは、決して絶対的な存在者として衆生を超越しているものではなく、むしろ衆生の「生死勤苦の本を抜かん」として、発願より成就までに、衆生の苦悩の場に立ち、

否、衆生そのものとなつて、その苦惱を自らに担うて衆生を撰取救済せんとして、仏自ら菩薩道を向上することを現わすものといえる。仏は自ら菩薩の場に立ち、菩薩道を歩むことにおいて、真に仏たらんとするのである。『大経』の阿難と仏の問答に注意するまでもなく、法蔵菩薩もその本来において仏であり、阿弥陀仏と本質を一にする十劫成就の仏である。しかし法蔵菩薩は、菩薩であつて未だ仏ではない。一切衆生を我が国に生れしめてのみ、真に仏と成るのである。菩薩は從因向果の仏名である、しかし法蔵菩薩は、如來する因位の菩薩であるから從果向因の仏でもある。如來の名において語られる限り從果向因の仏であり、悲願の菩薩にあつては從因向果の仏である。

このように法蔵と阿弥陀は、質を異にする仏ではない。しかし本質において同一性を有しながら非連続的に思念されているのは、阿弥陀仏も法蔵菩薩として衆生の場に立ち、衆生となつて衆生を往生道に立たしめることにおいてのみ、真に仏と成るといふ、仏生成の道程を示すものといえる。仏自身におけるそのような自己内生成展開のはたらきが、本願の發起であり修行である。したがつて本願として自らを現わさない仏は、未だ真実の仏ではなく、その慈悲は真実の慈悲ではない。親鸞は、本願をつねに大悲の本願というのは、衆生となつて發起され、衆生の場で誓われた大悲性を、つねに深く感得されたからであるに違いない。

親鸞の『大無量寿経』の領解で、さらに重要なことは、法蔵菩薩とは、本願の主体を現わす名であると同時に、信心という宗教的自覚の主体を現わす名でもあるという領解である。法蔵の無上仏道の志願が、菩薩の精神として教説されているだけでなく、その志願が、一切苦惱の群生海を機とする誓願において、われら衆

生の一人一人の上に信心として成就する、ということを明らかにされたのである。法蔵の名において語られる無上菩提心は、衆生にとつては確かに超越的な菩薩の願心である。しかしその法蔵を自証する本願の信においては、如來の願心と衆生の信心とは決して別なるものでなく、回向成就として一如であることを、親鸞は明確に自証されたのである。したがつて親鸞にとつて法蔵菩薩とは、本願の主体を現わす名であると同時に、一心帰命の信、すなわち宗教的自覚の根本主体を現わす名であつた。根本本願において、「至心信樂欲生我國乃至十念」と誓う本願の三心は、法蔵菩薩の五劫思惟において選択撰取された「乃至十念」、すなわち念仏を、真に衆生の行として成就せんとする信心そのものの働きてあり、一切衆生を我が国に生らしめることにおいてのみ、如來が真に如來たらんとする如來の大悲心の躍動が、如來の三心である。だから如來の本願とは、流転の衆生を外から撰取するというよりも、むしろ衆生の無明性、虚妄性を内から破つて、衆生における真に主体なるものとして名のり出、現前し現成しようとする、如來の根本意志であり、根本意欲である。

如來の本願とは、衆生の無明性や虚妄性を内から破ることによつて、衆生の業をして願の行ずる場所に転じ、衆生の業を転じて、自らの願を実現し成就せんとする大悲の働きてある。その場合、衆生の業の現実をどのように本願の行ずる場所に転ずるのかといえば、衆生の業のすべてを引き受けて自らに担い、そのことをもつて衆生を真に「一人」たらしめるのである。清沢滴之は、

無限大悲の如來は、如何にして私にこの平安を得しめたまふか。外ではない、一切の責任を引き受けて下さることによつて、私を救済したまふことである。(『我が信念』)

と喝破された。如来の本願がどうして宿業存在の根源的主体であるといえるのかといえは、如来は、われらの宿業を担うて立ち、それによってわれらを実存する一人に成就するからである。衆生を内に超えてその業を背負い、衆生をして真に実存たらしめんとはたらく法蔵菩薩の願心こそ、永劫流転に堪えうる根源的な主体であるといえる。如来の本願は、衆生を目覚まし、目覚めた衆生において自らを成就せんとする如来の大悲の働きであるが、その本願の大悲の名のり、招喚の声が、南無阿弥陀仏の名号である。

本願の教説において、最も重要なことは本願の成就ということである。本願の意義を本願成就ということに立って明らかにされたのが、『教行信証』の教学である。親鸞は、本願成就の文について、本願が成就するということは、「聞其名号信心歓喜乃至一念至心回向」といわれるように、その名号の聞信歓喜の一念に「至心に回向したまえり」という、主体的信の成立を意味するものである、ということを明らかにされた。十方衆生を我が国に生らしめんと誓う本願の成就は、そのような本願招喚の聲に喚び覚まされて、如来の願心に帰して生きる主体的信の成就の外ではない。久遠成就の仏も、信心決定における衆生の往生決定に、まさにその時を同じくして、今現在に仏としての真の正覚を成ずるのである。本願成就ということは、衆生における信心成就であって、信心成就は、最も厳密な意味における信仰主体、「親鸞一人」といわれるような信仰主体の成就である。

聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ。〔歎異抄〕後序)

本願の成就は、「親鸞一人」という根源的主体の成就であり、信仰主体の成就する時と離れて本願の真の成就はない。親鸞が「一人」という根源的主体を成就する現在に、久遠成就の本願が、獲信の親鸞の今現在に成就し、また仏の本願成就の今現在に、親鸞は「一人」という信仰主体を成就するのである。このような意味を、親鸞は本願成就文に見開かれたのである。

本願信心願成就の文

「経」に言わく、諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん、と。(信巻・原漢文)

本願の欲生心成就の文

「経」に言わく、至心に回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。(前同)

親鸞は一つの本願成就文を、本願信心願成就文と本願欲生心成就文に分け、「至心回向」を「至心に回向したまえり」と訓むことにおいて、本願の成就は、本願力回向の成就であり、衆生における信心の成就であって、その信心の成就は如来の欲生心の回向成就であることを訓み取られたのである。衆生に発起する信心は、如来の欲生心の成就であって、信心と願心は回向成就として一如であることを、親鸞は本願成就文に感得されたのである。そのことを最も具体的に推求したのが、「信巻」の三二問答である。

世親自誓の一心帰命の信心と本願の「至信心樂欲生」の三心とは、信仰的自覚の事実とその根拠として決して別でなく、即一であるという深義を尋ね当てたのが、三一問答である。帰命の信心と如来の願心とが、その根底において一である、回向成就として

一如であるということとは、「帰命は本願招喚の勅命なり」と言われたように、帰命の信心とは、私が如来に帰した心である以上に、如来が私に名告り出、私における如来自身の自己成就である。衆生の信心と如来の願心が、回向成就の信として一如であるという親鸞の独創的な思索の根底には、法蔵菩薩の発願において「設我得仏十方衆生」と喚んで、「若不生者不取正覚」と誓い続ける「我」と、「世尊我一心」と帰命の一心を表白された世親自督の「我」とは、畢竟別の主体ではなく、同一の主体でなければならぬという、親鸞の最も鋭い自覚的直観がある。「設我得仏十方衆生」と喚んで「若不生者不取正覚」と誓う大悲願心の主体である「我」が、いま「世尊我一心」と尽十方無碍光如来に帰命し、「願生安樂國」と表白する願生心の主体である「我」として、ここに現前し現成しているという自覚的直観である。大悲願心の主体としての「我」とは、「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまいて、無碍のちかきをおこしたまう」た因位の仏・法蔵菩薩である。したがって衆生に発起する信心の主体としての「我」も、願の主体としての法蔵菩薩であるといわなければならない。願の主体としての法蔵菩薩が、信心の主体としての名り出、現前し現成している。その推求が三一問答の主旨であったのではあるまいか。三心一心問答は、親鸞における法蔵説話の非神話化であり、最も主体的な法蔵菩薩の自証である。

親鸞の信仰主体性論の独創的な解明に決定的な突破口を開いたのが、曾我量深の法蔵菩薩の探究である。それは、「成唯識論」における阿頼耶識に触発されて、「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」と掲破された根本直覚として知られている。阿頼耶識とは衆生の根本主体を現わす概念であるから、それは「法蔵菩薩は我なり」と

いう根本直覚であるといえる。「法蔵は我なり、されど我は法蔵にあらず」という自覚は、自己を如来の救済の対象として捉える立場を超えて、いわば大乘の無上仏道を成就する唯一の機として自己を捉え、自己を自覚するという、極めて積極的な意味をもつ仏道了解である。このような自覚が根本信念として成熟するまでには、一つの思想的な歩み、深化徹底があったことは言うまでもない。その歩みを、大正二年七月の論文、「地上の救主——法蔵菩薩出現の意義——」の中で、次のように記している。

私は昨年七月上旬、高田の金子君の所に於て、「如来は我なり」の一句を感得し、次いで八月下旬、加賀の暁烏君の所に於て「如来我となりて我を救い給ふ」の一句を回向していただいた。遂に十月頃「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」と云ふことに気付かせてもらひました。(曾我選集)

曾我が清沢満之に出遇つて以来、絶えず思索の中心にあった問題は、「如来、我を救うや」という問いであったが、その問いにいま決定的に開かれた一つの直覚、それが「如来我となりて我を救い給う」という一句であった。その直覚をさらに根源化し自覚的に問うて、ついに「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」という画期的な了解を得たのである。法蔵菩薩とは「如来が直に我となり給う御姿」であり、「法蔵菩薩は自ら如来が衆生となれることの表明」であつて、それが根本本願たる第十八願であると了解されたのである。「如来、我を救うや」という真宗救済の根本問題を「如来直に我となる」と直観し、「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」といつて、法蔵とは本願の主体であるだけでなく、一心帰命の信の主体でもあるという、最も体験的で主体的な了解を示されたのである。本願の信の自証として、信

心自らの主体が法蔵菩薩と尋ねられ自覚された曾我の了解は、親鸞の本願觀、信心觀を最も深く鋭く尋ね当てた理解であると思う。

親鸞は三二問答において、願心と信心の一如性、願心の主体と信心の主体の一如性を明らかにされた。願心は信心の根拠であると同時に、信心は願心の回向成就である、したがって如来の真实性は、信心として我においてある、自己の全体をあらゆる働きとしてのみある。親鸞が本願の三心の推究において、三心が結局疑蓋無雜の真実の一心に凝集し、いまそれが一心帰命の信として現前し現成しているという自覚の根底には、つまり願心の回向成就の内幕として、求道の根本主体である法蔵の願心と自己の自我心との熾烈な戦いがあり、その自己心を根底より摧破して勝ち名乗ってくる永い因位の光景のあることを明らかにされたのである。信心の回向とは、実は最も厳密な意味における主体の回向なのである。願心の主体である根源の「我」が、いま世尊の教説に賜った信心の主体である「我」として、ここに現前し現成しているという事実、それを親鸞は「願心の回向成就」という独創的な言葉で捉えたのである。三二問答における願心の推究は、まさに親鸞における法蔵菩薩の自証であったといえる。

このように如来因位の仏である法蔵菩薩が、本願の主体であるのみでなく信心の主体を現すものであるとすれば、われら衆生は本願の信において、如来と如来を生み出す根源を獲得し、如来自証の無上涅槃の徳を信心の徳として賜わり、無上涅槃の徳の働く機に転成するものであることも、自然に首肯されるのである。すでに親鸞は、選択本願の行信に開かれる仏道の内容を「誓願不可思議、一実真如海」と了解されたのであった。その根拠は、『浄土論』『論註』の不虛作住持功德の教説に拠るのである。

この文のころは、仏の本願力を觀するに、まうあふてむなしくすぎるひとなし、よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむとのたまへり。(中略)しかれば金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに、大宝海とたとえるなり。(『一念多念文意』)

よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信する人のそのみに満足せしむるなり。(『尊号真像銘文』)

如来の智慧海、無上涅槃の世界は、深広にして涯底なき唯仏独明の世界であつて、生死界の衆生には、ただ不可思議なる世界として仰ぎ見るより他はない世界である。しかしいま、如来の本願に喚び覚まされ、回向成就の信において、無上涅槃の徳が「しらずもとめざるに」「すみやかにとく」信する人の「その身に満足せし」められるのである。煩惱罪濁の衆生と深広無涯底の如来の智慧海とは、絶対に質を異にする世界でありながら、本願の信において円融し、如来の無上功德を賜つて生きるものとなるという、驚くべき事実を深い感動をもって親鸞は語っている。本願の信において、如来と如来を生み出す根源を獲得し、如来自証の無上涅槃の徳の働く機に転成するからこそ、信心の行人は、いまやこの現実を最も積極的に生きるものとなるのである。一心帰命の信は一心願生の信として、願生浄土の仏道にわれらを立たしめるのである。ここに、本願の行信道こそ群萌に開かれた大乘の至極であるという意味が、深く首肯されるのである。